

びっと・いん



★料理まで「気まぐれ」？
ラ・カプリチオス

トアロードに新しく誕生したイタリア料理店「ラ・カプリチオス」。以前は、ライプも演っていたバブ「クリスチャン・リユー」で親しまれていた。

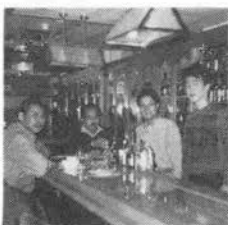
「カプリチオスという名はイタリア語で『気まぐれ』という意味なんです。その名の通りここへ来れば、料理もそうですが、何かがある。そんな中でお客さん、お店の同士が楽しく語りあえるアットホームな雰囲気づくりにしたいですね。」とオーナー林さん。



かわいいお店ラ・カプリチオス

店内。生活の中の「気まぐれ」を求めている。

住所／中央区三宮町3丁目8-12
☎(391) 2687
11:30 AM - 11 PM 第2・3水曜休
★楽しい会話と良心的価格がモットーのMOTTO
レストランフックのマネ



マスターの松田さんを囲んで

ージャー歴15年のベテラン松田浩一さんが3月2日、スナックMOTTOをオープンした。エメラルドグリーン椅子がポイントの店内は15席。明るい雰囲気、気軽に入れる店だ。万国共通語のMOTTOが店名だが、この店のモットーは？と尋ねると「安いことがモットーです」とマスターの返答。若い人も安心して会話を楽しみたいと思ふ欲満だ。マスターの暖か

い人柄に魅かれてオープン早々人気上昇中！

□東門筋(サンライต์プラザビルB1) 6 PM - 12 AM 祭日休 TEL 078-391-8170

★ハイカラ神戸の味を気軽に「ビストロ・ジロー」

トア・ロードにあるレストラン「ハイウェイ」の大



ハイウェイのマスター

東八郎さんの次男、大東二郎さん夫妻が、三宮本通りの一筋南の通り「花串」の二階に昨年3月からキッチンスタイルの「ビストロ・ジロー」を開いて人気を呼んでいる。「ハイウェイ」で11年修業した二郎シェフが、もつと手軽にとビフカツレツコース¥1500、フイレットビーフコース¥2500、タンシチューコース¥1500、クリームコロッケコース¥1500(ライス・コンソメサラダ付)というメニューとお値段で、眼の前で作る「ホット」なお味。

ハイカラ神戸の港町の味とムードで、若夫婦の手料理とサービスがいい感じ。

★神戸市中央区三宮町2丁目11 AM - 3 PM 5 PM - 9 PM ☎(331) 3607

●神戸うまいもん

フランス料理と神戸ビーフ

レストランフック

夢香亭

神戸市中央区栄町通2丁目11 TEL 321-3207、321-3453、332-4129

神戸ステーキの老舗、レストランフックが創業20周年を迎え、従来のフック東京と南京町の夢香亭を運営していた岩田夢隆氏の店となった。

フック神戸店を運営していた夢隆氏の義弟、岩田弘三氏は、高級デリカテッセン(株)ロックフイルドとレストランウインドジャマーの経営に専念することになった。

レストランフックでは、フランス料理と神戸



レストラン・フック

ステーキの他フランス風懐料理の夢香亭もそのまま続けられている。心機一転したレストランフックへも、ぜひお立寄りください。

ポケット ジャーナル



★ユニバ・フェスティバル

幕明けは神戸まつり！

神戸まつりが、今年は5

月17日（金）～19日（日）

に開催される。

今年のまつりは、15回目

という節目であるとともに

ユニバーシアードの100日前

ということもあって「ユニ

バーシアードがやってきた

」というサブテーマが設

けられ

る。特に

19日の

メイン

フェス

ティバ

ルでは、東遊園地南の噴水

広場を「I・V・Y・S・シヤイ

ンフェスタ」とし大学生や

若者を中心に企画運営。若

さあふれるまつりが期待さ

れる。

★本誌主催の写真コンテス

ト／秋／表彰式

本誌三月号で発表した写

真コンテスト／秋／の表彰



若さあふれる祭りにノ

てい



西満也
作品をは
じめ四十
五点が会
場に展
覧、出席

者がそれぞれ感想を述べあ

っていた。

小泉美喜子副編集長が受

賞者に表彰状並びに賞金を

手渡し、その成果を讃えた

次の春／夏／への

期待が高まる集まりだった

★散文に浮かび上がる人

竹中郁エッセイ集

神戸の生んだ素晴らしい

詩人。竹中郁が亡くなって

三年。出版されていない散

文は膨大な量にのぼる。

その中か

ら今回、詩

と美術に関

するエッセ

イ集「消え

ゆく幻燈」



竹中郁エッセイ集

と美術に関

が三月十六日、トアロード

いく乃画廊で催された。推

薦の「晩秋の風見鶏」（大

満也）

西満也

作品をは

じめ四十

五点が会

場に展

覧、出席

者がそれぞれ感想を述べあ

っていた。

小泉美喜子副編集長が受

賞者に表彰状並びに賞金を

手渡し、その成果を讃えた

次の春／夏／への

期待が高まる集まりだった

★散文に浮かび上がる人

竹中郁エッセイ集

神戸の生んだ素晴らしい

詩人。竹中郁が亡くなって

三年。出版されていない散

文は膨大な量にのぼる。

その中か

ら今回、詩

と美術に関

するエッセ

イ集「消え

ゆく幻燈」

と美術に関

と郷土・身近についての随筆集「私のびっくり箱」が足立巻一の編集で発行された。本誌連載の「私のひろいもの」もその一部。軽妙潤達な詩風でモダニスト詩人の位置を築いた竹中郁の中に浮かぶ本である。「消えゆく幻燈」編集工房ノア2800円「私のびっくり箱」のじきく文庫1800円

★名谷に本格的な野球場が

60年度着工

春から秋にかけて、プロ

野球の勝敗に一喜一憂する

熱狂的なファンにとって、

嬉しいニュース。

ユニバーシ

アード神戸大

会の主会場と

なる神戸総合

運動公園の中

に、野球場が

作られること

になった。

規模は、両翼が99・1m

センターが120mと、公式野

球規則にのっとった全国で

2番目の球場で、収容人員

3万5千人、鉄筋コンクリ

ート5階建という大規模な

もの。63年の完成が待ち遠

しい。

★グリーンエクスポートに

巨大な天狗登場！

今年7月21日から神戸緑

合運動公園で開かれるグリ

ン



自然に囲まれた野球場

アード神戸大

の主会場と

なる神戸総合

運動公園の中

に、野球場が

作られること

になった。

規模は、両翼が99・1m

センターが120mと、公式野

球規則にのっとった全国で

2番目の球場で、収容人員

3万5千人、鉄筋コンクリ

ート5階建という大規模な

もの。63年の完成が待ち遠

しい。

★グリーンエクスポートに

巨大な天狗登場！

今年7月21日から神戸緑

合運動公園で開かれるグリ

誕生日
ありがどう
運動



★福祉教育を進める有野台小学校と海星女子学院中学校

誕生日よりがとう運動の啓発紙

増刊第八号を発行しました。

内容は、第一と三面が、神戸市

北区の市立有野台小学校の「養護

学校に通う子との交流」です。

同校の校区内に居住して養護学校

などへ通学している児童、いわば

地域とのつながりのうすい子と、

同校の子どもの交流を積極的に働

きかけておられる努力に感謝しま

す。障害児をもつ家庭が、他人に

あまり知られたくないなどで消極

的なのに、同校から熱心に働きか

け親の心を聞いていっての交流学

習です。

障害児の様子をVTRにおさめ

全校生に視聴させることや、PT

Aでも積極的に交流学習のことを

学習されています。

こうした交流が、すべての小学

校で真剣に取り組まれば、地域

福祉は、うんと進展しすべての子

が共に育っていくことでしょう。

四面では、神戸海星女子学院中

学校の「福祉の心を育てる修学旅

行」です。同校が昭和五十七年度

から実施している岡山市の福祉施

設旭川往への修学旅行です。この

旅行で生徒達が、障害児や老人の

人間性に魅了されて、生徒達の人

生観や生き方に大きな影響を与え

ています。

この旅行が、高校へ進んでから

の有志生が体験合宿となり、福祉

教育がさらに大ききものになっています。

啓発紙増刊第八号ご希望の方は
左記へご連絡ください。
★誕生日ありがどう運動本部
81神戸市中央区御幸通八ノノ六
神戸国際会館一階の郵便局の隣
電話二五一八六一 内線三六

ーンエキスポに出展する。この「パビリオン」が「さくら」の村」基本計画が決まった。「天狗が誘う技のふるさと」をメインテーマに、高さ8m、幅6mの巨大な天狗のミニチュメントを設置し、ふるさとを



天狗が呼んでいる口で、え、日本

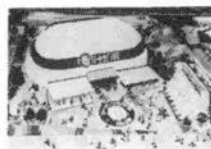
の伝統工芸と匠たちの仕事を天狗のキャラクターを中心に紹介する。

天狗は人々に新しい技を教えてくれたという視点から、天狗と人との出会い、技が生まれる様子を音と光で語ったり、古来、匠たちが生み出した不思議な技を展示し、科学的に説明する。

★H₂O館で「水」と遊ぶ
神戸の水道は明治33年に給水始めて今年で85年。全市の給水ネットワークが完成、「市民皆水道」を達成したが、それを記念し、「ウォーターフェアKOB E'85」とし「コウベグリーンエキスポ'85」にH₂O館を出展する。

パビリオンは、「考えよう水くらしと水、資源としての水」を統一テーマにアプローチ、プロロ

グ、シアターゾーン、テーマ展示ゾーン、サービスゾーンの5ゾーンから構成されるが、メイン展示となるシアターゾーンでは、'84年ニューオールリズ「国際河川博覧会」で日本政府館メイン展示として上映された三面マルチ映像「ST



H₂O館完成予想図

シアターゾーンの間は、口径2600mmの実物水道管で結ばれる等、盛りだくさんな内容である。

★神戸水上警察署がペン字展

調書を字に書いてねに書くためにペン字を習う——と聞くとちよっとドツキリするが、それが昂じて展覧会の域に達す、となれば微笑ましい限り。

「みなさんのおまわりさんペン字展」おまわりさんの四季」と題した展覧会が神戸水上警察署主催で、三月九日から同十三日まで、さう七階で展示された。

四季を題材に約百三十点の健筆の数々に構図も計算された秀作揃い。書家の望

月美佐さんの題字も花を添え、来場者にも好評。



倉田総署長(右)らが「データバンク」の努力

をみてやって下さい」と照れつつも目を細めていた。

★井戸を掘ろう

ブルキナファソンで

若者のアイドル、ボーイジョージ他ロック界のスターが勢揃いしたグループ「バンドエイド」のレコードが世界中で注目を集めたようにアフリカ救済熱が高まっているが、アジアを中心に農村開発事業を推進しているアジア協会でもアフリカでの事業に乗りだす。今回は、世界最貧国10カ国に入るアフリカ西部の小国、ブルキナファ

pyrota

のフィリピンで活動するボス

ンへの灌漑用、飲料水用井戸の提供で、当協会ではこの総事業費300万円を一般より寄付をつる。この運動により深い理解をお願いしたい。

お問い合わせ/アジア協会 大阪市北区曾根崎新地2丁目5-14 TEL 06(341)0587

図書ガイド



ひあ DATA BANK 1985

劇場公演の座席券に画期的なコンピュータシステムを導入。新しい分野を開きつつある「びあ」が、'84年に刊行された26冊分のDATAを加工、集大成した全く新しいタイプの年鑑。映画・演劇・音楽・美術の四分野の'84年度のあらゆる情報を網羅。その他内外のアーティスト45名のインタビュー集、ボスター・ラシ・傑作選など盛りだくさんの内容。1800円V

新マーケティング 船井 幸雄著

経営コンサルタントとして数多くの企業の方向性を示してきた流通業界のトップ、船井幸雄による「船井理論」の全貌を明かす傑作。チェスコム、アイワールド、三田屋、スシタイム、自然海、サンリオ、フレッシュジュース、フットワーク、セコム、ダイイチなど情報化社会で急成長をとげた異色企業の成功のノウハウを分析、急成長の決め手を解く。(ビジネス社刊 ¥1200)



コウベ居酒屋 ガイド 吉田 清彦著

「昔ながら縁の無かった女・子供も酒場でよく見られる子になり、食べて、楽しめてリゾナブルな店は繁盛している。三宮を中心に六甲から西宮、元町から姫路の食べたい店や大阪の穴場に加えて、ガイドマップ写真入りで厳密に紹介されている。意外に若い女性に熱読されそう。神戸新聞出版センター ¥1,000)

★ギャラリー ブチコウベ
オープン

神戸出身で、トルコを中心に人、風景を描き続けている画家の藤田清照さんが画廊「ギャラリー・ブチ・コウベ」を始めた。
ワシントンホテル横、シンミチビルの地下にあるギャラリー



ぜひご利用下さい

室内装飾で中近東のムードが漂う
素敵な空間。

3月14日からオープン記念
展覧会として、林武・野

花時計



シンガポール再訪

シンガポールといえば東洋の美港として名声が高い。そのシンガポールの生い立ちは、神戸とよく似ている。
だから何処となく街のたたずまいに親しみが持てて楽しい。

機会があつてシンガポ

口弥太郎・小林和作・中川
一政の版彩画展が4月11日
まで開かれる。

5月からは藤田さんによる
月曜サロン、クロッキの
会が開かれる予定で、バラ
エディーにとんだ画廊にな
りそうである。

ギャラリーブチコウベ 中央区下
山手通2丁目10-4 シンミチビル
地下 電話321・2439

★新兵器登場！ アメリカ
生まれの生ゴミ処理機
生ゴミのない暮らし信じ
られますか？

アメリカ生まれの「ディ
スポーザー991」を使えば、
台所の生ゴミが瞬間的に消
え、生ゴミの容器はもう必
要ありません。



ディスポーザー919

この機械は、ステンレス
スチールとスペースエイジ
の科学最先端高度技術に
よつて開

スイッチひとつで生ゴミを
粉々にし、下水へ流すしく
み。クリーンな毎日を、デ
ィスポーザー991がお約束し
てくれます。

□お問い合わせ／南ハウスウェア
〒550神戸市中央区栄町通3丁目6の
7 大栄ビルディング5F 503号 電話
78(332) 2141代表

ールを再訪した。シンガ
ポール航空の直行便はサ
ービス満点、わずか七時
間の飛行でチャンギ空港
に到着である。いつもな
がら花咲き乱れる美わし
のシンガポールである。

そのシンガポールはい
ま、コンベンション都市
をめざして積極的に活動
している。現在、パリ、
ロンドンなどに次いで世
界第6位。アジアではNo
1の実績を誇っている。

現在、ホテルの収容能力
は一万六千五百室だが、
来秋には「ラッフルズ・

シティ」と「マリナー・
センター」に壮大な施設
がオープンすれば一躍、
二万七千室を持つことにな
る。勿論、コンベンシ
ョン施設は圧倒的に強化
される。そして、政府親
光局のコンベンション・
ビュローがそのソフト面
のサービスに全力投球で
あたる。こんな具合で国
をあげてコンベンション
都市づくりに奔走してい
る。この馬力には脱帽。
神戸も安閑とはしてお
れないのである。

△Y△

KOBE POST

★作家の島尾敏雄氏が転居されま
した。新住所は〒892鹿児島市吉野
町八七四五

★神戸二紀会へ中西勝兵庫県支部
長Vが、三十周年を迎えたのを機
に韓国へ。昨年出来たソウル支部
の展覧会に15点出品するため二紀
会のメンバー11人が4月5日から
10日間の日程で、文化交流を兼ね
た旅行に出発。

★日本及びネオトロピカル協会の
森善一、美代子会長ご夫妻の長女
久美子さんが、刊物微さんと3月
31日に高輪プリンスホテルで結婚
式をあげられます。ゴールインお
めでとウ。

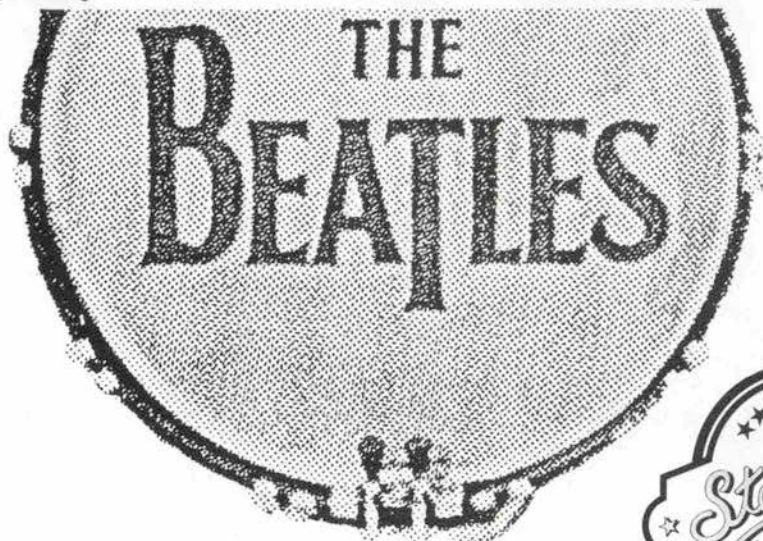
★樹木下真珠木下章夫社長の妹さ
んで、真珠コリーネーターの眞
佐子さんが3月30日京都大学医学
部の中西実忠教授と結婚式を京都
の都ホテルで。心よりお祝い申し
あげます。

★オリンピックのロスアンゼルス
大会で活躍した馬淵よしのさんが
米国テキサス州立マカラハイスク
ールを卒業し、4月より同志社女
子大学、文学部英文科に進学し
普通的女子大生として勉学に精進
されます。西宮市高座町15ノ18。
★財団法人民主音楽協会に勤務さ
れていた佐々木昭美さんが、この
程退職され、創価学会加古川文化
会館に勤務されました。〒675兵庫
県加古川町天神木93ノ4 電話(07
94) 2116731

★株式会社ヤマガワ神戸店(三宅
賢一店長)が、日本橋大飯店の拡
充に伴いクロージ、フラワート
ードに新営業所を移転されました。
〒650神戸市中央区八幡通4ノ
2ノ14 プラザ・トロア・コウベ
3F(神戸市役所向い) 電話078
(241) 21111(代表)

★花隈にある観光旅館「鈴江」の
鈴江喜人社長が亡くなられ、若千
26才の鈴木嘉喜さんが新社長とし
て就任されました。

ビートルズは、
また熱い。



オープン記念 ウェルカムサービス

★ご飲食代50%OFF
17日(水)～19日(金)の3日間に限り、ご飲食代を半額でご奉仕。(ボトルキープも半額でOK)

★持込みキープOK
好きなボトルの持込みキープができます。(※5月末日限り。持込みキープ料が必要です)

★ステッカープレゼント
ご来店先着1,000名様にステッカーをプレゼント。

スタークラブ スペシャルシステム

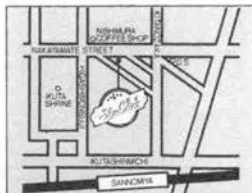
◎皮製メンバーズカード
ボトルをキープの方に、当店オリジナルの皮製メンバーズカードをプレゼント。あなたのサインがその場で皮に刻まれ、キーホルダーに

もなる素敵なおカードです。

◎会員ナンバーは永久登録
ボトルメンバーとして登録されたあなたの番号は当店にて永久登録。専用ナンバーが、あなたのステイタスを保証します。

◎バースデーサービス
会員の方にはバースデーカードを郵送し、このカードをご持参の方にブルゴーニュワイン(ハーフボトル)をプレゼントします。

◎このほか豊富なメニューをご用意。また、多彩なイベントを開催。



4月17日水 ビートルズライブ「スタークラブ」OPEN!

〒650 神戸市中央区中山手通1丁目13-7(神戸山下ビルB1) PHONE (078) 391-6640 営業時間:PM6:00～AM3:00・年中無休(日曜・祝祭日も営業しております)



三平の

神戸おもしろ風俗記 そのウ

『地の調べ』奏でる

ウェスタン仙人



るぼらいたー

小関三平

〈神戸学院大学教授〉

ジャズとカントリーにかけては、神戸が、大阪や京都の先輩にあたる。いまだき流行^{はや}行^はらなくはなったが、それらが売り物のライヴ・ハウスは、いくつかあって、「伝統の灯^{ともしび}」を、細々と守りつづけている。

けれども、バンド演奏もBGMも、電話もガスも、店員も商売気もなしに、都心から離れてひっそりと、古ぼけた穴倉みたいな店に寝泊りしながら、「古く良き西部」の「シンプル・ライフ」にこだわる、老マスターを知る

人は、あまりにも少ない。

ウェスタンに取り憑かれて四十年の、このモグラ仙人を知らぬ者は、モグリでしかない。その人の名は、進藤政行さん——経歴不詳・天涯孤獨・市井^{しやう}の独学アメリカ史家にして、エッセイスト・ギタリスト、かつは、純喫茶「カウボーイ」の店主・バーテン・ウェイターなのである。

阪急六甲駅から真っ直ぐ南へ、八幡宮東沿いに下り、バス道路を越えて百メートル余、二筋目を右へ折れると、彼の店がある。

が、仙人の客は千人もいるかどうか、怪しい。義侠心厚く、「放っとけん」と思いつめる「ホトケのカッチャン」なんかは、「アコ^{アコ}の値打ちがワカラん奴は、アカン」と言うのだが……。ブン蚊人の品定めをするリトマス試験紙、というような意味だろう。

「ホトケのカッチャン」とは、誰あろう、安井賞を何年も前に受賞した、兵庫二紀会支部長・中西勝画伯であり、カッチャンにモグラ・オジさんの存在を教えたのは、カ

人生60年、花も嵐も踏み越えて。
この面構えがすべてを語っています。



一面湿気におおわれたドアに、貼られる苦きコーヒーの由来(左上)
15年にわたって燻し上げられた道具類(左下)魔窟の密談?(右)

イチヤンの咲子夫人である。

今でこそ、進藤さんは、「紙魚の手帳」(創元社)・「山と溪谷」・「神戸からの手紙」・「日刊アルバイト・ニュース」果ては「アン・アン」・「ノンノ」にまで紹介され、今は、六甲・南天荘書店の「野のしおり」に、エッセイまで連載して

いや、この煤は並大抵のものではないわいと見上げ、会話する客には我聞せず、ギター掻き鳴らすカウボーイ。

が、彼を初めて活字で紹介したのは、中西咲子さんだった。

で、ホトケは絵筆を休め、「帝国陸軍」の元ダメ二等兵(自称)にして剣道三段の大股・早足で、疾風の如くに鴨子ヶ原より駆け下り、アタシをリトマス紙であぶり出さんとか、かのハウエスタン洞窟へと、拉致したのである。

それは、六甲嵐の吹き荒ぶ、とある冬の夜のことであった……ジャーン!

さて、「カウボーイ」への道は、簡単でも、扉を開けるには勇気が要る。が、中に入れば、感歎する。全店これ、燻された感じで、石油とタバコの煙りたなびき、小沢昭一からホクロを取って長髪・着たきりスズメにしたような、ベとベと・ジャンパーのクロマニヨン原人が、ヌツと現われ、ジロリと客を一瞥する。すべては木造りで、十五年の歳月を刻み、ガタビシと鳴る。棚には錆びた空缶がビツシリ。

そこへ、ホトケの山羊ひげ・オジさんと、ホホひげ・オジンのアタシが訪れ、長髪原人と語らう。まるで、魔窟の三奇人である。スンバラシイではニヤいか?

夜の「新地」よりは、日陰の湿地に人知れず咲く、ひっそりとした隠花植物に、私は惹かれる。「酒ハ大関、名ハ小関」と称しても、「コーヒーはブラック、名はシンドー」と聞けば、頭が上がらない。ある意味では、シンドクさえある。

なぜなら、入り口の上・その裏・メニユー表・便所の扉に、びっしりと手書きの英文が、認められており、シンドー仙人お薦めの「カウボーイ・コーヒー」は、熊の胆のごとく煎じられて、真っ黒・なみなみと注がれるのである。実は、ホトケ画伯との「初夜」以来、四たび通って八杯の「ブラック」を飲んだあげく、夜な夜な、胃が痛むような気が、したのであった。鍛えかたが足りない。

それにしても、当今では稀れにみる、その「ボヘミア

ン」的ムードは、スバラシイ。あえてボン引き・ヴォランティア(?)を勤めるみたい、山羊ひげ画聖に伴われた幽名人たちのみならず、「作られざる個性」に魅せられ、気取らぬ「スキンスツ」に寛ぎを求る、学生カップル・若きサラリアート・アーティスト・教師族・主婦族も多い。

私は、パリのボヘミアン集う「穴倉酒場」を懐しく想い起した。「水ヲ飲ミ、肘ヲ曲ゲテ枕ト為シ」た孔子の高弟・顔回、あるいは、樽の底に棲みつ、「そこ退け、陽の邪魔じゃ」と、アレクサンドロス大王を一喝した、哲人・ディオゲネス、はたまた、「親もなく妻もなく子なく版木なく、金も無ければ死にたくもなし」と嘯いた、寛政の三奇人の一人にして『海国兵談』の著者・「六無齊」こと林子平たちの、名譽ある血族として、シンドー仙人は、清貧・高潔(但し低血)の士なのだ。しかも、顔回・ディオゲネス・子平も及ばざるは、数種の英々辞典と、読み古した数百冊の洋書に埋れて暮す、進藤センセイの英語の読書力に、ほかならない。その上、興到れば、鉄絃・五本のレキント・ギターを爪弾き、「カウボーイ・ソング」ばかりを、ファルセット(ヨードル)を加えて、歌う。

だからこそ、このマルチ賢人のライブ演奏を、山田貴光・奥平正明両氏がソノ・シートに収め、彼の短文集『西部夜話』を、曽我了二氏がタイブ印刷する気に、なったのだし、近くの『春待ち疲れバンド』で弾き語る神田修作君が、ここに憩いもするのである。

いや、ヴィヴィアン・リイだって、仙人を、あの轟惑的な「黒い瞳」で、いつも見守っているのだ。便所の扉



ギターのみならず、アコーディオンもお茶の子さいさいこれぞウェスタンの真髄。

に貼られた、「風と共に去りぬ」の灰色がかったボスターは、湿気にベトつき、彼女の鼻から下が黯んではいるが、それだけにまた、紫頭巾の如く、双眸は、妖しく浮き立ち、光りを放つ。

『大草原の小さな家』(英書で九冊)を愛読する、孤独な夢喰い人は、

ヤングとミドルの女たちに愛され、母性本能を操りもするから、バレンタイン・チョコには事欠かない。家賃三万円・生活費一万五千元(ノ)を稼ぐのも儘ならぬほど、不景気だが、仙人は、キーキがお好きなのである。

もつとも、「草酒ノ山門ニ入ルヲ許サズ」と掲げる禪寺じゃないけど、「カウボーイ」なのに、なぜか、酒を買うことは許さない。サケの氣を孕んで入っても、イケない。で、常に微醺を帯びて立ち現れる山羊ひげ画伯は、アルコールとセックスを「不潔」視して止まぬ、老「西部学」教授に、いつも、窘められては、「なんで、カウボーイが禁欲せんなんのや?」と、その矛盾に首傾げ、内心に葛藤を抱きつつも、そこはホトケゆえ、「へ、へ、へ」と、テレ隠しに微笑笑しては、軽くにこやかに、やさしく、いなすほかない。

にもかかわらず、画聖は、お弟子さんの、女流の作にしては些か風変りな油絵を、殺風景な穴倉に、唯一の彩りある装飾品として与え、それどころか、原人と洞窟のシリウスなパロディを、幾つも連作しては、画家とキャフェの、稀れに見る幸せな「めぐり逢い」を大切にし、絆を温め合うのだ。

中西さんは、先ず、二紀会の「白と黒のオブジェ」展に、「日蝕」と題する「黒い日の丸」を出品し、次いで



置き時計も空罐を利用すれば振り子に大変身
(上) これすべて愛読英書。(中)「大草原の小さな家」全9巻を英文で読み上げた家系図

進藤さんお手製の丸テーブル(上) 今や「カウボーイ」は中西画伯の重要な絵のモチーフでもある(中) かくして今宵も暮れ、カウボーイを後にする(下)



——と、作者は語る。簡素・清貧と、油と湿気の滲んだ茶色い辞典に、ひたむきな生と、一つの芸術をも、感じたと言う。

が、仙人にも悩みはある。健康が思わしくなく、自分の土地に理想の店を建てるに必要な二千万円を、誰も貸してくれないことだ。この無形文化財を、「年金受給者」に追いつめるようでは、「コーベ」も、たいしたことはない。頭を垂れるべきなのである。

進藤さんが使い古した辞典とその千切れた細片を、銀の器に載せ、ナイフとフォークを添えたオブジェに、「古いアメリカを食べる男の肖像」と名を付け、「ギヤラリー・北野坂」の表を飾り、更には、昨秋、進藤さんが店内でギターを弾く、「地の調べ」を、百号(正方)の油彩に描き上げさせた。(神戸二紀会・三十周年記念作品集) ライト・モティーフとまでは言えぬにせよ、三作に共通するのは、星条旗と日章旗を奇妙にブレンドした、ユーモアとアイロニーだった。

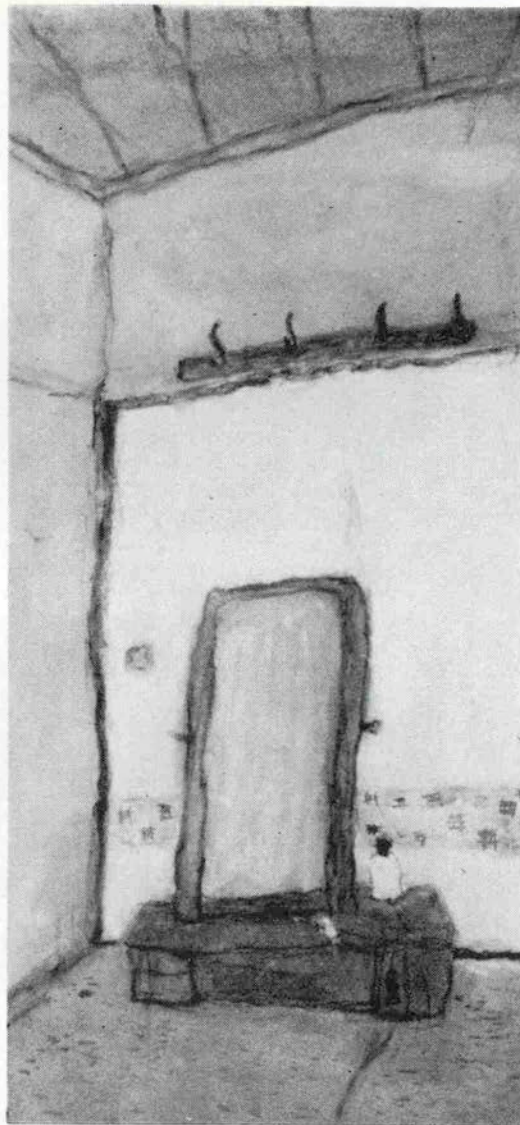
とりわけ、最新の大作は、直線と円の交響するコンポジションによって、玄人筋の大評判を呼び、今は、各地で展覧中である。だが、それを産み出したのは、なによりまず、「ギターを弾く横井正一」の情熱と、その「自由人」精神への、共感・畏敬と、秘かな羨望の念だった

★次回は、神戸のユニークな漫画家集団「漫協」を訪ねます。メンバーは全員女性！ 如何なるレポートになりますか。お楽しみに。

■第9回神戸女流文学賞受賞作
連載小説《第1回》

宇山 翠

題字・絵／大島 幸子



一、
物置小屋のドアの取っ手を握ろうとして、立ちどまつた。ひるむものがある。

ドアの内側で、湿っぽい体を震わせながら交尾する小さな生きものの姿が、燕子の頭に広がっている。

おぞましさが胸に衝きあげた。

(この中で、また、あの白い卵を産み続けるつもりな

のか。一匹だけではあるまい。三四、八匹、十匹……いや、それ以上の数の生きものが……)

枯れ葉色の背中が、すべるように這い回ったり、よじ登ったりする光景を想像している。千枚通しの先のように細く尖った尻尾と、白い腹を持つ生きものだ。

つい先日、その長い尻尾が物置小屋の土台石の隅から覗いているのを見た。

彼らは新しい生命を産み出すための準備を抜かりなく執拗に、やっていることだろう。

古い物置を壊し、新しく建て替えてから一年二か月が経つ。以来、恭子がこの中に足を踏み入れたのは五、六度くらいだったろうか。掃除を怠っていたのは事実だ。好ましい棲み家とばかり、彼らは移動してきたに相違ない。

家事は妹の朋子に任せっきりだった。

（任せることで、朋子の生き甲斐を支えたつもりだったか……）

苦く、つらい思いを恭子は噛みしめる。

物置小屋の中の品々に詳しいのは、いまとなつては恭子よりも矢川サキのほうかもしれない。このドアに覗き窓を造ることを提案したのもサキである。

一年二か月前、初めてこの家に来たとき、矢川サキは白髪まじりの頭を折り目正しく下げ、挨拶した。

「奥様、どうぞ、よろしく願ひ致します」

顔のしわは深い、面立ちは上品である。小柄な体にレースのワンピースを涼しげに着ている。白いメッシュのハンドバッグと布製の手提げを膝の横に置いていた。想像していたより以上に身ぎれいな相手から、《奥様》と呼ばれ、恭子はむずがゆさを覚えたものだ。

この辺りでは主婦を《奥様》などと呼ばない。《奥さん》が一般的であり、無難な呼称だ。

恭子は、その《奥さん》とさても呼ばれない。《土井さん》である。彼女を《奥さん》と呼ぶのは、この町内を少し離れたところに開店したスーパーのレジか、行きずりに道を尋ねる人くらいだ。

勤務先では当然、姓を呼ばれるが、それも陰では《女史》で通っている。職場での彼女は、目の光が強いと言われる。仕事に精通しているので頼られる半面、煙たがられもする存在だった。

勤務先の製鋼会社をその日は休んでいる。

梅雨あけの暑い日であった。

家屋の大修繕に取りかかる初日である。

必要に迫られてとはいえ、他人を朝から夕方まで、それも二か月近くにわたって、家庭内に入れるのは、滅多にない、いや、初めてのことだ。

第一、お手伝いさんを雇えるような身分ではない。

「ねえさん、一日に三千円も払うなんて、ばからしいねえ」

前夜、妹の朋子はまたしても愚痴をこぼしたものだ。

その言葉を制している。

「そんなことを言ったって、私、明日と明後日は勤めを休むけれど、そのあと、あんた一人じゃ、どう仕様もないでしょう……？」

一日、三千円は安いほうだ。若い人を雇えば、五千円は払わなければならないだろう。

「五十日くらい、なによ。辛抱しなさい。あんたの家を修繕してあげるのよ」

朋子の顔は晴れない。母の死後は、神経質なくらい預貯金の残高を気にするようになっていた。大工、左官との応待の煩わしさも……というより、彼らの好奇の視線の下に自分の姿を曝さねばならないことが苦痛なのだと分かっている。

無理もない、とは思いつつも恭子は声を励まざるを得ない。

終戦後、手に入れた中古の家屋を、父は幼い朋子の名義にしている。不惑故にである。父が死に、やがて母が死んだ。家屋は建てられて四十年にはなる。家の年齢と恭子の年齢にあまり差はない。

古びた家屋の大修繕の段取りとしては、まず、物置小屋が取り壊されるはずであった。

「奥様、なにか致しませうか」

矢川サキが指示を仰ぐように膝をついていた。目は真剣に張りつめ、こちらの表情をうかがっている。いつの間にか簡単服に着替え、エプロンを着けていた。

恭子は相手を値踏みする目になっている。好奇心が頭をもたげてもいた。

（この女：息子や娘たちはいるのだろうか）

戸外で人の声がある。

「職人さんでございましょうかねえ」

サキは素早く立ちあがった。年齢に似合わず軽やかな身のこなしだ。

親娘^{おやぢ}ほども年齢^{とし}の違^{ちが}う矢川サキとの関わりは、この日から生じたのである。

二、

十月も終わりに近いある朝、妹の朋子がポツリと言った。

「このごろ、息が詰まりそうな感じよ」

「――」

「古いガラス戸をアルミサッシに換えたせいかしら：ねねえさん、なんともない：？」

恭子は出勤前の化粧に忙しい。

口紅を塗りながら答えた。

「じゃあ、ひるの間は開け放しておきなさいよ。寒くない程度に：」

「――」

「煙の手入れも休んだら：？　もう、虫も出ないわよ」

「そうね」

「来年になったら、あそこは売るから……もう少しの辛抱だからね」

ねぎらいの言葉をかけつつ、指はティッシュペーパーを摘みあげている。唇にはさみ、余分な紅を取る。

今朝は抜け毛が多かった。色つやのない抜け毛の、かなりの嵩^{かさ}を手^てにのせてみる。嵩^{かさ}はあっても抜け毛は頼りなげに揺らぐ。邪険に握りしめ、くずかごに入れる。

いったんは膝を立てかけたが、座り直した。

髪にポリウラムが足りない。頭頂部にブラシを入れ、

逆毛を立てる。ふんわりと盛りあがった頭髪を両手で軽く押さえ、鏡の中で顔を左右に向けてみる。髪形次第で、若くも老けても見られる年代になっている。

出がけに縁側のガラス戸を開いた。銀色に光るサッシの手触りが快い。

いちじくの大きな葉が黄ばんでいる。

いちじくの枝が堀越しに見えたことで、両親はこの古家屋への買い気を唆^{そと}られたらしい。戦争が終わったとはいえ、食糧品はまだ豊かに出回ってはいないころのことである。病人の呻^{うめ}き声を聞いて成長すると言われる植物だが、そんなことは誰も気にはしなかった。

学齢前だった恭子は、甘い実がなるということに大はしゃぎだったと、あとあと聞かされた。

が、両親もすでに亡いまとなつては、別の思いでこの植物を眺めずにはいられない。

なにかで読んで得た知識だが、△無花果▽とも書くこの植物は、実際には花が咲く。その色香を内に包んでいるだけなのだ。

（私の人生も、いちじくみたい）

虚しさ、苛^{いら}立たしさに束の間、とらえられる。その思いを振りほどく修練も積んだ恭子である。

バッグを提げる。

玄関を出た。

門扉までの間に敷いた踏み石は自然石三個ばかりだが、あのとき、ここを全部、小砂利にしなくてよかったと改めて思う。

朋子を振り返った。

「口紅、濃すぎる：？」

「もつと、濃くしてもいいよ。前髪も少し垂らしたほうが……」

朋子は、恭子が老けて見えるのを嫌がる。姉が嫁がず、老いていくのが耐えられないと口にする。

その一方で、ひとと身をすり寄せてきたりする。心の振幅の大きさが伝わってくる。

蒸子は努めて明るく振る舞うことにしていた。家事には疎い半端な女であることを示した。妹に対する精一杯の労わりだった。母の死後は、暗黙のうちに二人の役割が決まっている。

蒸子のスカートを縫うため、朋子は右足に力を入れてミシンを踏む。右の太腿だけが異常に太くなっていた。

ミシンは母が買い与えたものだが、いまでは超旧型になっている。そのミシンに油を差し、後生大事に使って

いる。足を使わなくてもすむ新型を買ってやろうとしても、朋子は承知しない。この家から金銭が出ていくのを嫌がる。

「あんたの縫ってくれるスカートが一番、穿きやすい……助かるわあ」

手の利いた妹がいる幸せを匂わせる。

朋子はうっすらと喜びを顔に浮かべる。

ミシンを踏んで、朋子は自分のものも縫う。縫わざる



を得ないのだ。彼女の体に合うブラウスなど、どこにも売ってない。独得の、いびつな体型だからだ。

この妹を生涯、扶養してやらなければならぬという意識が、恭子に勤務先での仕事を第一義的に考えさせている。

門を出たところで、恭子はわが家の外壁に視線を這わせた。このところ習慣のようになっていた。塗料の剥げ落ちた板壁は姿を消し、モルタルの外壁が陽に映え、白く際立つ。古い住居は費用をかけた分だけ正直に新しい貌を見せている。

バス停に急いだ。

バス停の裏側の角地に黄色いショベルパワーが止まっている。鋼鉄製の機械は重く冷たく、辺りを睥睨^{びにら}していた。掘り返された赤土をかぶり、雑草の一叢は萎^{しぼ}えていた。

（この土地も売れたらしい。百坪はありそうだが……）

恭子は坪単価を想像した。

「畑」と呼んでいる朋子名義の空き地の売却を考えているからだ。両親と移り住んだところは寂しい町並みの外れだったが、いまでは北部九州の百万都市の行政区域に入っている。地価は、高くはなっても低くはならない。家屋の大修繕で貯金は半分に減ってしまった。貯金通帳に見入る朋子の青白い顔が胸をよぎる。

（朋子の空き地は、どのくらいの値で売れるだろうか）大ざっぱな金額を頭の中で弾いている。

家の前の六十坪の区画が「空き地」になった経緯は、町内に古くから住む人なら誰でも知っているはずだと、母は口癖のように言っていた。町内ぐるみで「空き地」にしたと言いたげだった。

三十数年も以前のことだが——そのころ、恭子の一家はこの土地に移り住んでいる。

当時、この辺りには道路を隔て県が管理する百軒ばかりの住宅があったという。そのうちの三分の一は疎開に

よる空き家だった。人が住まわぬ家は、まさかと思うほどの早さで荒れてしまうものらしい。

敗戦後の飢えと寒さは、無住の家屋群の荒廢に拍車をかけた。燃料に困った人々は空き家の壁板を剥いだ。ガラス戸や畳はおろか、陶製の便器さえも持ち去られている。

果は、荒れ果てた住宅を持てあまし、引き倒した。一戸の敷地は四十坪ある。雑草が生い茂る四十坪の区画が入札で次々に払い下げられていったのは、その後である。恭子の母は、自宅のすぐ前の、幅六メートルの道路を隔てた一区画を四千三百円で手に入れた。この区画だけは、どういう訳か、他の区画より広く六十坪あった。それだけに、うらやましがられた。

道路に面した側に母は古材木やトタン板を使い柵^{さく}を作った。扉をつけ、鍵をかけた。自宅のぬれ縁に立つと、幅六メートルの道路越しに空き地の様子が手に取るように分かる。分かる程度に柵の高さを按配した。高すぎでは見透せない。低すぎでは他人が乗り越える。巡らせた柵の補強に柵^{さく}を植えた。

空き地という空き地に野菜や陸稲を作った地主たちも、食糧難時代を切り抜けると、土地を転売したり、家を新築したりした。

周辺の空き地が様がりする前に父は死んだ。

空き地としての命脈を保っているのは、朋子名義の六十坪だけとなった。

母はそのことに誇りを抱いた。ひたすら野菜を作り、花を育て、通行人の足をとめた。

「まあ、お花がきれい……野菜も、よくできている」と

そういう声が風にのって家の中まで聞こえてくると、母は相好を崩したものである。